

おわりに

終えて振り返ってみると、ずいぶんといろいろなことが書けたものだと思う。マッサ・マリッティマという、イタリアのトスカナ州にある小さなコムーネについて語るには、それ自体の話をする前に説明しておかなければいけないことがたくさんあったし、それ自体を語るうちに、国全体やヨーロッパへと広がっていく要素があったからである。

この論考の構想を練っている間に、マッサ・マリッティマで多くの人々と話すことになったわけだが、その間に「それは面白そうだ、ぜひ読みたい」という声も地元から上がってきた。私は無謀にも、最初は、イタリアの人々にも読める内容、つまりイタリア語に翻訳しても読みごたえのあるものを念頭においたが、途中でそれには無理があることに気付いた。書き進めるには、誰のために書くのか、をはっきりさせることが最も重要な決定事項であったと思っている。

この論考は、そうした経緯を経ながらも、純粋に、日本の人々に向けて日本語で書かれたものである。日本側からは「好きなように書いていただきたい」という要望だけであったので、全く自由にやらせていただいた。日本の都市や社会にヒントになりそうなことを、小さなことでも意識して拾い上げている。イタリアの人がこちらで見る景色と、日本の人があちらから見る景色ではだいぶ異なる。私はちょうどその中間にいるから、このようなものができたわけだが、イタリアでは当たり前なことさえ、あえて意図的に書きとめた。イタリアを知る人にとっては、「何だ、そんなことか」ということでも、イタリアをまったく知らない人には、意味のある情報だと思うからだ。研究という活動は、何かにつけて専門的でなければならないから、概してこういった基本的な情報は見逃されがちだけれども、むしろ、本質をつくものが隠されているだろう。

イタリアに長年住んだことが、多くの視点を養ってくれた。さらに言えば、学問の世界にだけ生き続けてきたとしても、こういうかたちでは生み出せなかっただろう。何がこの仕事のエッセンスとして大きく役立ったのかといえば、さまざまな世代・職業・経歴を持つ人々と、コミュニケーションを持ってきたことである。つまり、無意識のうちに習慣的に行っていた日常生活そのものが、活かされている。マッサ・マリッティマの人々は、多くのことを私に語ってくれた。私は、それらを受け止め、見えるかたちで表現し、文献により裏付けをし、より発展させて調べて系列的にまとめた、というだけのことである。ふとしたことをきっかけに始まった立ち話がどんなに役立ったかもしれない。それらは偶然、予期せぬときに起こるようなことも多かった。

また、十数年来、友人として親交がある人たちが、この機会にとっても有益な情報を与えてくれたことはとても力強く、大変に有難かった。マッサ・マリッティマのテルツィエーレ(歴史的地区)、「ボルゴ」の地区長を 25 年も務めているルチャーノ・バルトロツィ氏 Luciano Bartolozzi と、その妻で、ミュージアムで働くフランカ・ネレリ氏 Franca Nerelli、このおふたりには、公私ともに大変感謝している。フランカは、私が抱く小さな

疑問にいつでも笑顔で答えてくれる存在であり、ルチャーノには、今回は特別に時間をつくってもらって、テルツィエーレ独特の仕組みについて、ボルゴ地区の会議場で単独レクチャーしてもらった。

そして専門的な分野で大きな力になってくれたのが、市役所で活躍する建築家、サブリーナ・マルティノツィ氏 Sabrina Martinozzi である。彼女の勤務時間内にアポイントを取り、マッサ・マリッティマの大聖堂広場に立つ市役所 3 階の彼女のオフィスにお邪魔して、約 1 時間ずつ、間に数カ月をおいて 2 回にわたって、インタビューを行わせてもらった。私たちはその時、私的な面で話したいことが別にあっただけけれども、限られた時間内でお互いが専門家としての話題に集中し、その結果、内容はとても刺激的なものになった。この貴重な機会により、公共事業や地方行政に関して、一般の人々にはなかなか見えにくい専門的な視点を強化してもらったことになる。

また、この仕事の話をしてから知り合い、非常に多くのインスピレーションをいただいたのが、マルコ・パペリーニ氏 Marco Paperini である。2014 年の春から 10 年ぶりにマッサ・マリッティマの市長が代わったが、新市長の人事により文化評議員という重要な役職に就任したのが、パペリーニ氏であった。本職は中世を専門とする歴史家で、イタリア各地で地域に基づいた学際的なシンポジウムを開催している、とりわけユニークな人物である。マッサ・マリッティマについての歴史の本を書いたことが、今回の役職就任のきっかけとなったそうである。研究の有能なプロモーターである彼とは、出会った瞬間からすぐに気の合う間柄となった。彼の仕事上のパートナーである建築家、ジュリア・ガレオッティ氏 Giulia Galeotti は、フィレンツェ大学にてマッサ・マリッティマについての論文を書いており、これまで建築の分野で本格的な研究が少ないため、非常に貴重な存在であると思う。彼女との話や著作、研究発表からは、多くの示唆を得ることができた。

そして、私の生活の基盤である家族にはあらゆる面で助けられた。夫と娘は、それぞれの得意分野で本領を発揮し、適切な助言をしてくれた。彼らとともに積み重ねた年月が、この論考への膨らみとして反映されている。地方行政について書くのは初めてだったが、それができたのは祖父のおかげである。最晩年までそのことを真剣に語るような人であったので、無意識の中で、自分の中に素養が培われていたようである。

こうして多くの人々の恩恵を得てできあがったのが本書である。この論考をイタリア語で再編するとしたらいったいどのようなかたちになるだろうか、と考えると同時に、彼らもまた日本の都市や地方行政に大に関心を持っているのだから、これを機に、相互に交流を深める方向に向かっていただければ、と願っている。

最後になるが、学生時代から絶えず、熱いエールを送り続けてくださる恩師の陣内秀信教授、そして実りある学生時代を共に過ごした陣内研の仲間たちに心より深く感謝申し上げます。